

## 家畜治療師

「呼んじやいないよ」

治療師とリタの二人が豚飼いの家を訪ねると、ペタニ小母さんは不機嫌そうにそう言った。

「治療師なんか呼んじやいないよ。あたしも豚たちもいたって健康さね」

「あんたがいい豚飼いだって話は聞いているよ。病気の豚なんか出したことがないんだってね」

治療師はペタニ小母さんをなだめるように言う。

「そうともさ。うちの豚たちは病気になんかなりやあしない。それに去勢もあたしが自分でやるんだ。治療師の世話にはならないさ」

「そのことなんだがね。うちの見習いのリタに豚の去勢の見学をさせてはくれないだろうかね。見習いの修行に必要なんだよ」

「なんだって。リタのためだっていうのかい」

「お願い、ペタニ小母さん」

「リタのためだって言うなら、もちろんいいさ。それにリタが治療師になるのをやめて、豚飼いになる決心をした時にも役に立つからね。いっそ、いまずぐ治療師見習いを止めたらどうだい」

「そうはいかないのよ、ペタニ小母さん。ごめんなさい、あたし治療師になりたいの」

「まあ、いいさ。リタになら教えてあげるよ。さ、あんたは帰った、帰った」

「ああ、嫌われたもんだね。まあいい。それじゃあ、リタ、しっかり勉強してくるんだよ」

「はい、治療師」

ペタニ小母さんは治療師が見えなくなるまで待つてから、リタにささやくように言った。

「あたしや豚のことしか知らないけどね。豚だつて人間だつて同じことだと思っね。病気の豚を治すより、豚を病気にしないことが肝心なんだよ。だから治療師なんて仕事は世間で言われているほど大した仕事じゃないんだよ」

豚飼いにそう言われると、リタはそうかも知れないと思った。人間だつて病気になるよりはならない方がいいし、怪我だつてしなくて済むならしない方がいい。

「でも、どうしたら病気にならないようにできるの。きつと、それがわかっていたら治療師だつてそうすると思つわ」

「人間のことは知らないけれどね。豚はしたいようにさせておけばそうそう病気になるもんじゃ

ないのさ。なにしろ、世間で考えているのと反対に豚はそりゃあ清潔好きなんだからね。その上、食い物には好き嫌いが無いからね。病気になる理由なんか元からないんだよ」

「そんなはずはないわ。だって治療師の仕事の中には家畜の病気を診ることもあるって聞いたわ。その中には豚も入っているはずよ」

「たいていの豚飼いはね、欲に目が眩んで、豚のしたいようにはさせずに、自分の都合に合わせて豚を育てるからさ。だから、豚が病気になるんだよ。豚飼いなんで仕事はね、豚さえ病気にならなけりゃ、なかなかの実入りがあるんだよ。それを欲に目が眩んで、狭い小屋に閉じ込めたり、面倒がつて糞を替えてやらなかったり、豚の大好きな泥遊びを止めさせたりするから、豚が病気になるんだよ」

「人間はそんなに簡単にいかないと思っつわ」

「そうだとしても、病気を治すより病気にしない方が大事だつて言っつその点は同じだろっつさね」

「そうかも知れないわね」

「さ、豚の去勢だね。そろそろ去勢しようかと思っつていた子豚がいるからやってしまおうかね」

「ねえ、ペタニ小母さん。豚は去勢されるのが

好きなの？」

「こりゃ、参ったね。いや、好きじゃないだろ  
うね」

「じゃあ、豚のしたいようにさせていることに  
はならないわ」

ペタ二小母さんはもつともらしいことを言う  
が、そんなによく考えている訳ではないのかも  
知れないとリタは思った。

「まったくその通りさね。でもねえ、牝豚は気  
性が荒くて豚飼いの言うことを聞かないし、喧  
嘩をするし、肉が固くて脂身が少ないからねえ。  
いいところがないんだよ。もちろん、牝豚に子  
豚を生ませるには牝豚が必要だが、それは一頭  
いればいいからね。まあ、あえて弁解するなら、  
去勢しないと喧嘩をして怪我をしやすいとい  
うところかね」

「それが全部去勢すると治るの」

「そうさね。去勢した牝豚は牝豚みたいに大人し  
くなるものさ。時々あたしが思うのは人間の男  
でも乱暴者なんかは去勢した方がいいんじゃない  
かってことさね」

「そうかも知れないわね」

「はっはっ。どのみち治療師の領分じゃないよ。」

さて、今は母豚が三頭に牡豚が一頭に若豚が十五匹に子豚が七匹いるが、これから去勢するのは牡の子豚三匹さね」

豚飼いはそう言いながら家の中に入り、台所の竈の中から火種を探し出して小枝に移して持って来た。焼きゴテも持っている。

「これをやらない豚飼いも多いんだがね。あたしゃこれをやった方がいいと思うね。傷口を焼くのだ。治療師だって人間にやることがあるだろつよ」

そう言われてもリタは答えられなかった。まだそんなことは習っていないかつたし、もし習っていたとしても、治療の技の秘密は教えられない。「はっ。組合の掟というやつかい。そんなもん縛られる治療師よりは気楽な豚飼いの方がどれだけいいか知れないさね。リタも考え直した方がいいだろうつよ」

豚飼いは豚小屋の裏手に到着した。その隅にたき火をした跡があり、豚飼いはそこで火を起した。それから、脇を流れている小川から桶に水を汲んだ。その小川は豚飼いが地面を掘って作ったもので、村の中央を流れる川から豚小屋まで水を引くためのものだった。その小川の水

を使って豚飼いは豚小屋をいつも清潔に保っていた。

それから豚飼いは腰につけた鞘からナイフを出して豚の革で研いだ。

「ほら、お前の父さんの作ったナイフだよ。こうして、ちよっと研ぐだけで見事な切れ味さ。これで切られたら、子豚も何が起ったのか気がつかないくらいさね」

豚飼いは火の中の焼き「テ」が赤くなっているのを確かめてから、豚小屋に行つて子豚を一匹連れて来た。そして丸太を置いただけの椅子に腰かけて、両足の間に子豚を後ろ向きに抱え込んだ。それから紐で、子豚の睾丸を縛つた。

「すぐに終るからよく見ておくんだよ」

そう言つと、豚飼いはナイフで子豚の睾丸を切り落とし、その傷口に焼き「テ」を押し当てた。一連の動作は素早く淀みがない。子豚が一度小さな悲鳴を上げるだけの時間しかかからなかった。「ほら、どうだい。そんなに嫌がるって程でもないだろう」

豚飼いが子豚の口に砂糖漬けを押し込むと、子豚はもう痛みを忘れたかのように喜んでそれを食べた。

「とにかく素早くやるのがコツだね。時間がかかると子豚も不安になるし、子豚の悲鳴が何度も聞こえると豚小屋にいる他の豚たちも不安になってくるからさね」

リタは予想していたほど子豚が痛がっていないよつなので少し安心した。

「じゃあ、次はリタがやってごらん。お前はやさしい娘だから、こういうことは苦手かも知れないけどね。やるなら、多少強引でもとにかく素早くやることだよ。もし嫌だったら、見るだけでもいいんだよ。治療師にはちゃんと実地にやっただって言うておくからさ」

自分でやるとなると、リタはやはりまだ少しためらいがあった。でも、やらないと治療師を騙すことになってしまいうし、ペタ二小母さんに嘘をつかせてしまう。

「やるわ」

「よし、いい子だ。とにかく、ためらわずに素早くやるんだよ。もたもたしていると子豚も不安になるし、痛いってことに気がつくからね」

豚飼いは去勢の済んだ子豚を豚小屋に戻し、次の子豚を連れて来た。リタは豚飼いがやったように丸太の椅子に腰かけて、両足の間の子豚を

後ろ向きにはさんだ。子豚は不審な匂いがする  
のか、リタの服の匂いをしきりに嗅いでいる。

「さあ、一気にスパツとおやり」

リタは唾を飲み込んだ。それから、紐で睾丸を  
縛り、もう一度唾を飲み込んでから、ナイフで  
睾丸を切り落とした。ほっとしていると、豚飼  
いが焼きゴテを子豚の傷口に押しつけた。それ  
からリタは渡された砂糖漬けを子豚の口に押し  
込んだ。

リタの一連の動作は豚飼いの二倍以上かかり、  
子豚は三度も悲鳴を上げ、少し暴れた。

「まあ、最初はこんなもんさね。じゃあ次の豚  
にいつてみようかね」

豚飼いの連れて来た子豚をリタは去勢した。今  
度はさつきよりも素早く出来た。最後に焼きゴ  
テを押しつけるところもリタがやった。

「よし、よし。うまいもんだよ。やっぱり豚飼  
いになった方がいいんじゃないかね」

終ったと思うとリタは緊張が解けた。子豚を抱  
き上げて撫でてやる。

「さて、切り取ったこいつを食べるかね。生じゃ  
臭いが、火を通せば結構うまいもんだよ。精も  
付くさね」

「遠慮しておくわ」

リタは急に頭を切り替えることが出来なかった。豚がそもそも人間の食べ物であるということをつい忘れてしまう。ソーセージや塩漬けの豚肉はリタも好きなのだけれど。

「街じゃあ、結構高い値で売ってたりするらしいんだがね。まあいいさ、若い娘が精を付けても仕方ないからね。じゃあ、油漬けにでもしておくかね」

そう言ってから豚飼いは切り取った睾丸を食料庫に置きに行き、その間にリタは小川から桶に水を汲んで、少しだけれど垂れていた血を洗い流した。

「いつもは森に連れて行って、好きに遊ばせておくんだけれどね。去勢した傷口に泥でもつけるといけないから、今日は小屋に入れておきたいんだよ。それでこの子たちの小屋をきれいに掃除するから、手伝っておくれ」

今日は豚飼いに去勢の仕方を習っているのだから、治療師見習いではあっても、一時的に豚飼いが師ということになる。だからリタは去勢とは関係のない作業であつても手伝わなければならぬと思つた。それに、傷口を清潔に保つた

めの作業であれば、去勢と関係がないとは言えない。

豚は清潔好きだと豚飼いは言っけれど、豚小屋に入るとやはり臭い。豚飼いはその部屋にいた豚を全部小屋の外の囲いに追い出した。母豚が歩くとしゃんしゃんと鈴の音がする。リタが見てみると、母豚の耳に鈴がついていた。

「かわいいわね。でも、耳に鈴がついていたらうるさくないかしら？」

「あれは、子豚に母豚の居場所がいつでもわかるように付けているのさ。だけど、お前は豚の気持ちになって考えるんだね。うるさいかも知れないなんてさ」

豚飼いは部屋の中の糞を全部外に出して干した。それから小川から桶に水を汲んで小屋の床に水を流す。そして床の上をブラシでこすってきれいにする。

「このブラシの毛だってさ、豚の毛なんだよ。まったくどこからどこまで使えないところは一つもないのさ、豚ってやつはね」

汚れた水は溝に流れこんで、その溝は別の小川になって村の東の畑の方に流れて行く。

小屋の中を洗い終わると、豚飼いは外に出し

た藁を調べて、きれいな藁と汚れた藁を分けて、きれいな藁を豚小屋の中に戻した。汚れた藁は別の小屋に入れておくと、農家が持つて行つて堆肥にする。

不足分の藁は、藁を積んである小屋から出して追加する。小屋の中の藁はもう残り少なくなつてゐるが、麦の収穫時期が近いから、まもなく補充されるはずだ。

餌箱に餌を入れ、水桶に水を入れて、小屋の扉を開けると豚飼いは豚を呼んだ。

「ホウ、ホウ、ホウ。さあ、おいで。ホウ、ホウ、ホウ」

すると外に出ていた豚たちは凄い勢いで小屋の中に走り込んで来た。

「なあ、かわいいもんだらう」

「本当ね」

「よし、じゃあ、昼にしようか。うちで食べて行くかい」

「あだし、治療師の食事の支度をしないとけないから」

「そうかい、それじゃあ、塩漬け肉を持つて行くな」

「だめよ、今日は去勢の仕方を教えてもらった

のだから、その上、もらい物はできないわ」

「まあ、そう言わないでくれ。小屋の掃除を手伝ってもらったじゃないか。それに、去勢の仕方を教えたのはお前に豚飼いになって欲しいからさね」

「でも豚飼いにはなれないわ」

「わかったよ、とにかく、塩漬け肉は貰っておくれ」

リタは意地が汚いという訳ではないが、人が何かをくれるという時にそれをうまく断ることが出来ない。貰うことが悪いのか、断る方が悪いのか分からなくなってしまうのだ。

「やっぱり、お肉を貰うことにするわ」

「いい娘だね、ちよつと待ってておくれ」

豚飼いは食料庫に行つて、塩漬け肉を取つてくとそれを布で包んでリタに渡した。

「ありがとう、ペタニ小母さん。治療師見習いを辞めなきゃならない時はきつと豚飼いになるわ」  
「いいんだよ、またおいで」

リタが塩漬け肉の包みを持って治療師の家に向かつて歩いていると、空からそれを見つけたク口が降りて来てリタの肩に止った。

クロが飛べることがわかってから、治療師はリタに餌をやるなど指示していた。リタもクロが自分で餌を見つけられるように、餌を与えるのを止めた。それに巢立ちをしたんだから、もうクロのために巣箱もいらないうことで片付けてしまった。

リタが餌をやらなくとクロは自分で餌を取っているようで、以前ほどは治療師の家に姿を見せなくなったが、リタの姿は覚えているようで時々はやってきて肩に止る。

そして、もう自分で餌を取れることはわかったのだから、ちょっとくらいなら食べ物あげてもいいのではないかとリタは考えた。それから時々クロにパンのかけらをあげたりしていた。

「だめよ、クロ。これはお前の食べ物じゃないの」肉の包みに興味を示すクロにリタはそう言って包みを抱え直した。治療師の家に入ると、治療師が椅子に座ってうとうととしていた。塩漬け肉は夕食にまわして、作ってあった豆のスープを温めて、パンとバターで食事にした。

「どうだい、ちゃんと子豚の去勢は出来たかい」治療師がパンを食べながら聞いてきた。

「ええ、ちゃんと出来たわよ。タマを紐で縛って

ナイフで切って、焼きゴテを押し当てるの。そして終ったら砂糖漬けをあげるの」

「焼きゴテだって。なるほどねえ。まあ、砂糖漬けは関係ないけどね」

「それから、その日は森に放すのは止めて、よく掃除した清潔な豚小屋に入れておくのよ」

「そいつは結構なことだ。治療師が去勢しても、その後、そこまで気を使つ豚飼いは少なくてね」

「これでいいんですよ」

「そうだね。焼きゴテを当てないやり方もあるけれどね。その時は紐をきつく縛っておかないといけないね」

「それから切り取ったタマを食べるかって言われたけれど、なんだか気持ち悪いから、いらないうって断つたの」

「貰ってくればよかつたのに。あれは精力剤になるからね。媚薬を作るのに役に立つんだよ」

「知らなかつたわ。媚薬って何かしら」

「あとで教えてやるよ。それより豚の治療は大切だからね。ここで去勢しか習えないのは残念だね。まあ、そのうちよその村に行くようなことがあれば、いやでも病気の豚に出くわすだろうがね」

「治療師って動物も診るのね」

「そつだよ、何といても動物はいいね。お代が確実に貰えるからね。だってそつだろう、お代が払えないようなら、治療師に診せずに、殺してしまうからね。動物を診てお代を貰えなかったことはないよ。でも人間は情があるからね、お代がなくてもとりあえず治療師を呼んだりする。診終つて、薬を飲ませてそれからお代はありませんと言われることだつて少なくないからね」

「山羊や鶏の病気も診るの」

「診てくれと言われれば診ないこともないがね、鶏はだいたい病気になったら潰されるね。山羊は診るし、去勢することもあるね。まあ、お前みたいな見習いはまずは動物から診るのが一番だよ。万一手当てを間違つて殺してしまつても、大事にはならないからね」

「麦や豆の病気も診るの」

「それは治療師の領分じゃあなくて、農夫の仕事だね」

「あのね、ペター二小母さんが言っていたのだけれど、病気を治すより病気にしない方が大切だつて」  
「あの豚飼いはなぜかあたしのことを嫌っているようだがね。それでも言っていることは正しい」

いよ。だがね、豚だったら餌も運動も豚飼いの好きなように出来るが、人間はそうはいかないだろうよ。ビールは飲むな、ワインも飲むな。夜は早く寝て、朝は早く起きる。肉は喰うなとか、そんなこと言っても誰も聞きはしないだろうよ」「肉は食べない方がいいの」

「贅沢なものの食べ過ぎは良くないね。それにだよ、栄養のあるものを食べるって言ったって、お金の無いものには食べられないじゃないか。働きすぎは良くないって言ったって、お金のために働かなければならないこともあるじゃないか。豚飼いは豚を管理出来るけれど、治療師は人間を管理出来ないんだよ」

「治療師だってお酒を飲むものね」「何を言ってるかね。あたしがお酒を飲むのは、あたしが飲んだ分は他の人が飲めなくなるからだよ。他の人がお酒を飲み過ぎないように、その分をあたしが飲んでやっているんだよ」

「人間はこつやつて勝手な理屈をつけるから、豚みたいなわけにはいかないってことね。よくわかったわ」

「そう言えば、今日は豚を森に放さないって言ったね。それは南の森のことかい?。」

「そうだと思うわ」

「よし、いい機会だ。南の森に行つて何か役に立つ薬草が生えていないか調べてみようじゃないか」

リタは、豚飼いがいない隙に森に行つて薬草を探るなんて、なんだが泥棒みたいだと思つた。

南の森は歩きやすかつた。豚が毎日通るので広くてしっかり踏み固められた道が出来ていたからだ。

「まずは豚の通つた跡をつけてみようかね。その方が歩きやすいしね」

二人は豚の通つた道に沿つて歩いて行つた。豚は樫の木のたくさん生えているところでやや散らばつていたようだが、その先はまた一本の道になつて、沼地へと向かつていた。

「豚は泥遊びが好きだからね。よし、沼地にはあれが生えているかも知れないよ」

治療師は沼の周りをまわつて、植物を見て歩いた。

「あつたあつた、たぶんあれだよ。リタ、ちょっと沼に入ってあの草を引き抜いておくれ」

「底なし沼だつたらどうするの」

「底なし沼なんてそんなにあるものじゃないよ。それにあの豚飼いが底なし沼に豚を入れるわけがないだろうがね」

仕方がないのでリタはスカートをたくし上げ、腕をまくり、靴を脱いで沼に入る準備をした。

「それでも見た目よりは深いから気をつけておくれ。ほら、片方の手を持っていてあげるよ」

沼は膝の半分くらいまでの深さの澄んだ水の下に泥がその倍くらい溜まっていた。リタが足を踏み入れるとずぶずぶと沈んで太股の半分くらいまでは水に浸かってしまった。それでも足が底に着いてリタは安心した。

「根元から引き抜いておくれ」

そう言われて、リタは手をその草の根元まで伸ばしたが、そうすると結局服の片側はすっかり水に浸かってしまった。草の根元を掴んで引っ張ったが、力の入らない体勢だったので、引き抜けなかった。

「力が入らなくて引き抜けないわ」

「じゃあ、ナイフで根を切ってごらん。自分の足を切るんじゃないよ」

リタは足を切らないように気をつけようとしたが、泥の中に潜っている足がどこにあるのか

よくわからない。ナイフの背で草の根元を探つて、それが自分の足でないことを確認してから、ナイフを持ち直して草の根を切った。

「そう、これがトラキスだね。この葉の根元に近い泥に埋まっけていて白くなっている部分が痛み止めの薬になる。もう二本ほど採っておくれ」  
リタは治療師の言いつけに従って二本採ってから岸に上がった。濡れて泥が付いてしまった服を、水ですすいでから絞る。

「ああ、すっかり濡れてしまったね。じゃあ、残りはざっと見てから帰ろうかね」

「治療師、こんなに濡れているのを村人に見られたら、沼に入って何か薬草を採ったと思われるんじゃないかしら」

「じゃあ、乾くまで森の中を歩き回ってから帰ろうかね」

「泥もまだ付いているから、乾いても分かると思っわ」

「じゃあ、夕暮れ時まで待ってから、こっそり帰ろうかね」

「それじゃあ、ますます泥棒みたいだわ」

「とにかく、もう少し火の当たるところに行って、おまえの服を乾かそうかね。治療師見習いが風

邪をひいたりしたら、評判が落ちるからね」

リタはなんだか情けない気分になった。

二人で少し歩いてしていると日の当るところにでた。

「ほら、こここの石に腰かけてごらん、いい具合に暖まっているよ」

リタは言われたとおりに腰かけた。

「いいかい、リタ。治療師組合の掟というのはね、長い年月を経て作られて来たものなんだよ。その中にはこの村には合わないものもあるが、他の村に行ったら必要なこともあるんだ。どの草が薬草になるかは、秘密にした方がいいんだよ」

「それはわかるんだけど……。でもだからって泥棒みたいな真似をしなくてもいいと思うわ」

「いいかい、治療師がこっそり薬草を採るのはね、もしそうしなければ、村人がこっそり薬草を採るようになるからなんだよ。他人に泥棒の真似をさせるよりは、自分が泥棒の真似をした方がましってものだろう」

リタはまだ釈然としない部分もあったが、わかったような気がする部分も出て来た。

「それに悪いことばかりじゃないよ。ほら、ここに来たおかげで別の薬草を見付けたよ」

治療師は大きな木の根元に生えている腰くらいまでの高さの草をリタに指し示した。

「これは女の体調が良くない時に効く薬になる。オキトシアという薬草だよ。ほら、この枝が別れているところに丸い実のようなものが付いているだろう。これがいい薬になるんだよ。その上、料理して食べてもうまいんだ」

リタはオキトシアを引き抜いて、薬草袋に入れ、引き抜いた後の地面をならした。

「薬草もある程度採ったから、帰ったら薬草から薬を作るやり方を教えてあげようかね」

「うわあ、すごいわ」

「それに、新しくやって欲しいこともあるしね」

「それも楽しみだわ。ねえ、もう帰っても大丈夫じゃないかしら」

「まだ、陽が高いだろうが」

「でも、服は乾いて来たわ。もともとも黒いからあんまり泥の跡も目立たないみたいよ」

治療師がリタの服を見てみると、確かに近くから見るのでなければ沼に入っただとはわかりそうもなかった。もともと治療師も無駄に時間を過ごしたくなかったので、二人は日暮れを待たず

に家に帰った。

「まずはこれから説明しようかね」

治療師は薬草の袋からオキトシアを取り出した。その実を取って鍋に入れてゆで上げた。

「これは女性が月に一度体調が悪くなるけど、その時の調子の悪さが特に酷い人が中にはいるんだよ。そういう人にはふだんからこれを食べさせるといいんだ。けどね、普通の村人はそれを病気だとは思わないから、いちいち治療師を呼んだりほしくないんだよ。だから、これを食べるのは街のお金持ちの奥さん、お嬢さんが多いね」

「薬があるなら教えてあげればいいのに」

「治療師は薬を押し売りしたりはしないのさ。それにふだんから毎日食べるようにしないと効かないからね、一度の分はそんなに高くななくても結構負担になるんだよ。さ、茹で上がったよ」

治療師は薬草庫でオキトシアを入れる瓶を探したが、適当なものが見つからなかった。

「おや、古いオキトシアがこんなところにあつたよ。これを食べてしまつて交換しようかね」

そう言つて治療師は小さな瓶の中身をスープレの上にあけると、その瓶をリタに洗わせた。

「薬はね、一度作ればいつまでも使えるというわけではないんだよ。料理だってそうだろう。そりゃあ薬は十日や二十日で悪くなりはいないけれど、何年も保つわけじゃない。だから、浸かってない薬でも時々交換しなけりゃならないんだよ」

リタは考えたこともなかったが、言われてみればもっともなことであった。

「だから、病人に薬をやる時もその時に必要な分だけやるんだね。何しろ、薬というのは量によっては毒にもなるものだからね。それに古くなると効かなくなることもあるが、別の毒に変わってしまうこともあるからね」

治療師は瓶の中にオキトシアの実を入れて、その瓶に蜂蜜を満たした。

「なんだか、お菓子みたいね」

「オキトシアの蜂蜜漬けさ。蜂蜜に漬けておけば長持ちするからね。それに食べやすくなるし。ほら、リタ。ひとつ食べてごらん」

「古くなって毒になっていないの?」

「大丈夫だよ、一年ちよつと前のだから」

治療師はオキトシアの蜂蜜漬けを一つ指でつまんで口に入れた。それから指をぺろりと舐めた。

「うん、なかなかいけるね」

リタも一つ口に入れてみた。少し苦みがあるけれど、柔らかくそして蜂蜜の甘みが中まで染み透っていておいしいものだった。

「おいしいわね。おいしい薬があるとは思わなかったわ」

「お金持ちの奥さん向けだからね。もうひとつお食べ。あんまり食べるとのぼせるから、それでやめておくんだよ」

治療師とリタは一つずつオキトシアの蜂蜜漬けを食べて、残りは皿の上に別の皿を上からかぶせて蓋にして食器棚にしまった。

「それ以外の薬草はだいたい干しておいてから使うんだよ。それからね、薬草に似ている草もあるからね、採る時にも注意する必要があるが、採って来てから干す前にもう一度確認することが大切だよ。乾燥してしまうと見分けるのがずつと難しくなるからね」

治療師はリタを連れて薬草庫に入ると、戸棚の上から一冊の本を取ってテーブルの上に置いた。

「薬事全科だよ。治療師以外の者に見せてはならない本だよ」

「あたしはいいの？ 見習いだけど」

「見習いはいいんだよ。この本には治療師組合の持っている知識が書かれているんだよ。大切な本だからね」

治療師はそう言って、薬事全科を開いた。しばらくページを繰っていたが、あるところで指が止った。

「トラキス。沼地に生える草で丈は胸程になる。葉は細長く根元近くで筒状になる。根は地中で横に伸びて、そこから芽を出して増える。根元の白い部分が痛み止めになる。花は付くが実は成らない。ほらね、書いてあるとおりだろう」

「あたし、文字が読めないの。見習い試験の時に字をならったのだけれど、でも字は分かるけれど、知っている字が並んでいるだけで、言葉がわからないわ」

「そうだったね。それは覚えているよ。そこでだよ、リタ。この本を書き写して欲しいんだよ。書き写しながら、字を覚えて、そして書いてある内容も覚えられるという訳だよ。これは大切な本だからね、もう一冊欲しいと思っていたので」

「でも、あたし、ペンを使ったことがないの」

「じゃあ、そこから勉強するんだね。まあそんなに急ぐわけじゃあないから、他の仕事の合間

にやるんだよ。分からないことがあったらあたしに聞くんだよ」

治療師は棚から薄汚れた紙を一枚取ってリタに渡し、練習に使うように言った。それからペンとインクのある場所も教えて自由に使うように言った。

「それはともかく、今は痛み止めだね。これは白いところを切り取って箱に入れておいて、乾燥させるんだよ。それ以外の部分にも少しは痛み止めの効果があるから、残りは他の薬草と一緒に干しておいて、あとで傷薬を作る時に使う」

そう言いながら治療師はトラキスの白い部分を切り取った。そして残りの葉を紐で束ねて、天井から吊るした。それから、治療師は棚から蓋が斜めになっていてちゃんと閉まっていない箱を出して、その中に白い部分を入れ、中から乾いたトラキスを取り出した。

「これは煎じて飲ませる薬だから、そういうのはその小袋に入れておくんだよ。そうそう、その袋はね、縫い目のほつれたのがあったら、直しておいておくれよ」

治療師の指した袋は薄茶色の小さな袋で、口のところで紐で閉じられるようになっていた。空

の袋を一つ取ってその中に乾いたトラキスを入れて、紐を引っ張って口を閉じてから、更に口の周りを紐でぐるぐると巻いて縛った。

「こうして、小袋に入れておくとね。患者の家ですぐに薬缶に入れて薬が作れるだろう。それに中身が見えないから、どんな薬草なのか分からないという訳さ。ただ、問題が一つあってね。そのままだと自分でもどの袋がどの薬かわからなくなるってことなんだよ。だから、あたしはこの口のところの紐の縛り方で薬草の区別が付くようにしているんだよ。だから、おまえもこの縛り方を覚えて同じようにしておくれ」

リタは、なんだか急に覚えることが増えた気がした。

それから治療師は傷薬の作り方や、火傷の薬の作り方を説明した。

「それからね、リタ」

治療師がそう言ったので、また何かやることがあるのかとリタは身構えた。

「お腹が空いたから夕食にしておくれ」

治療師はそう言って、薬草庫から出ると台所で食器棚からオキトシアの蜂蜜漬けを出して一口に入れた。

リタはあわてて夕食の支度を始めた。

リタが薬事全科の書き写しを始めたのは、次の日の午後からになった。リタはまず練習用の紙でペンの使い方方の練習をした。大文字と小文字を書いてみたが、ペンが紙に引つかかってなかなかうまく書けない。その上、字の途中でインクがかすれてきたりするし、インクを付けすぎると書き出しが滲んでしまつて読めなくなる。

それだけでなく、乾く前に書いたところに手を置くとやはりインクが擦れて読めなくなつてしまふ。手を紙に付けないようにして書こうとすると字が震えてしまふ。あまり力を入れて集中して書こうとすると、額から汗が滴れてやはり字が滲んでしまふ。

治療師に訊いたら、力を入れないで書いた方がいい、力を入れるとペン先がすぐに駄目になるからと言われた。でもうまく出来ないことをなんとかしようとする、どうしても力が入ってしまふ。

リタが悪戦苦闘していると、治療師が喉が渴いたからお茶を入れてくれというので、お茶をいれてリタも一緒に飲んだ。

「思ったより大変だわ。字の形を覚えていれば書けるといふものじゃないのね。地面に書くのとは違うわね」

「まあそのうち慣れるさ。それより、薬草庫で書かずにここで書くといいよ。ここの方が明るいからね。一つしかない目玉なんだから大切にしないといけないよ」

「ありがとう、そうするわ」

「それから薬草庫の鍵をお前に預けておくよ。薬事全科と書き写した紙は薬草庫にしまって鍵を掛けておくんだよ」

リタは鍵を預かるとポケットにしまった。なんだか見習いから治療師に一步近づいた気がした。

その日の午後の空き時間は全部ペンの使い方、練習に費やして、ペンの使い方にも慣れて来たので、リタは明日からは書き写しに入ろうと思った。

そして次の日、リタがさて書き写しをしようと思つて、薬事全科のページめを見ると、最初の文字が見たこともない字で読めなかった。教わった字を忘れてしまったのだらうかと思つたが、そのページにある他の字はみんな見たことのある形をしていた。

最初の文字から読めないのは恥ずかしいと思ったが、仕方がないので治療師に尋ねた。治療師も最初の字をしばらく眺めて黙っていたが、少ししてから答えた。

「思い出したよ、これは飾り文字だね」

飾り文字というのは大文字に飾りをつけた文字らしい。治療師は薬事全科をめぐって、飾り文字が使われているのは初めのうちだけで途中からは使われていないことを調べ、普通の大文字で書き写せばいいと言った。

飾り文字は大文字の左側に飾りが付くので、右の端を見ると大文字が隠されているという。そう言われてみると、確かにバーの文字がそこにあるのが見えた。

「そうそう、この白い紙に書き写そうとするとどうしても文が曲がってくるからね。こう爪で真っ直ぐな跡を付けておいて、それに沿って書くようにするといいよ。今、思い出したんだね」

治療師は練習用の紙に物差しを当てて爪で跡を付けた。そしてその線に沿って文字を書いた。でも線の下にはみ出している文字もある。それはリタが最初に文字を習った時から、なぜか他

の字とずれたところに書いてあると思っていた字だった。

「この字は線の下にはみ出しているけどいいの？」  
間違うといけないから訊いてみた。

「ああ、この小文字は下にはみ出すんだ。教えてなかったかね。じゃあ、一通り書いておくかね」  
治療師はアーからズーまでを爪で跡を付けた線に沿って書いた。

こうやって書き写しを始めてみると、教わっていたと思った文字もあまり詳しくは教わっていなかったことがリタにはわかった。

「なに、要は書き写しが出来ればいいんだよ。どんなことだって、やってみてうまくいかなかったら、そこでまた学んだり、工夫したりすればいいのさ。やってみる前に何もかも準備しておくなんてことは実際には出来ないんだよ」

「治療もやってみてうまくいかなかったらやり直しをするの」

「そりゃあ、そういつものなんだよ。もちろん、病人を殺してしまつては仕方がないからね、そりゃあ慎重に治療はするさ。けどね、やつぱり効くと思つた薬が効かなかったり、この病気だと思つたら違つ病気だったなんてことはあるも

んなんだよ。そういう時は違う薬を使ってみたりいろいろ考えたたり、試してみたりするよりないんだよ」

治療師の語ることはリタの想像していた治療とは少し違うようだ。でもそういうものかも知れないとも思う。お父さんだつて、ナイフなんかを作る時は出来上がりをみてはまたちょっと叩いて直したり、もう一度熱してみたり、何度もやり直して最後に納得しているようだから、熟練の仕事というのはそういうものかも知れない。

リタは白い紙に爪で線を引いて、その線に沿って薬事全科から書き写していった。そして、一行目の最後近くになって困ったことが起つた。そこまでは薬事全科の文字をその通りに書き写して来たのだが、行の最後になってそれが出来なくなつてしまった。薬事全科の方にはまだ何文字か書かれているのに、書き写す紙にはもう字を書くだけの空きがなかったのだ。

リタはあまり何遍も治療師に訊くのはよくないと思つたが、同時に大切な書き写しで間違いがあつてはいけないとも思い、治療師の様子を伺つて、少し暇そうな時に訊いてみた。

「なんだ、そんなことかね」

治療師は特にあきれた顔をすることもなく、説明してくれた。

「これは順番通りに並んでいれば、次の行にいつでも構わないんだよ。逆に行の後ろが空くようだったら次の行から言葉を持って来てもいいんだよ。ただし、あんまり大きな字で書いたり、行の間を空けたりすると、紙がたくさん要るからね。かといって、あんまり小さい字で書いてみると、読みにくくて仕方がないからね。なるだけ一枚は一枚に入るように書いておくれよ。それから、この間に少し間隔があるひとまとまりが一つの言葉だからね、それは二行に別れないようにしておくれよ」

治療師はそう言っただけで一度話を止めたが、思い出したように付け加えた。

「そうそう、この紙は最後には片方を綴じて本にするんだからね。あまり端まで書かれると綴じた時に読めなくなるからね。もう少し端を空けて書いておくれ。いや、書いてしまった分はいいけどね」

リタは字を書き写すだけでも大変なのに、字の大きさを考えてちよつと一行に入るようにするのはとても難しいと思ったので、治療師の言葉

を聞いて少し安心した。

一行目からは治療師に尋ねるような問題もなく、比較的順調に書き写しは進んだ。ただ、爪で跡を付けるのはたくさんやると爪がすり減るということがわかったので、指を替えて跡を付けるようにした。

一枚の半分くらいまで書き写すと、肩が凝ってきた。これは慣れない細かい作業をしたからだろうと、そこで書き写しを止めて、治療師に言われていた小袋のほつれを縫うことにした。

薬草庫の棚の中には空の小袋が五袋あったが、リタが調べてみると縫い目のほつれているものが一つだけ見つかった。それを縫っても小さい袋なのですぐに縫い終わってしまった。

仕方がないので、また書き写しに戻ったが、肩の痛みはますます激しくなる。立ち上がって、肩をぐるぐるまわしたりしているところに治療師が帰ってきた。

「おや、肩凝りになったね、リタ。書き写しを始めるのだいたい肩凝りになるもんだよ。まあ病気という程じゃあないが、人によっては病気よりも苦しいというね。さあ、リタ、いいことを教えてあげようかね。肩凝りの治し方はね、治療

師よりもお針子の方が詳しいという噂があるね」  
リタはそれを聞くと着替えるのももどかしく  
急いで家に帰った。それから、ふと見習いの仕事  
中に家に帰ってよかったのだろっかと思っただが、  
治療師の話し方は家に帰ってお母さんに聞けと  
いう意味にしか取れなかったし、肩凝りの治し  
方はきつと治療の役にも立つだろうと自分に言  
い聞かせた。

「お母さん、肩凝りの治し方知ってる？」

「リタ、どうしたんだい。見習いの仕事はいい  
のかい」

マルカはお菓子を焼く粉を煉っていた手を止め  
て、リタの顔をみた。

「治療師が肩凝りの治し方ならお針子の方が詳  
しいって言うから。お母さんが知っているかも  
知れないと思って」

「それを聞きに来たの？ ちょっと待ってなさい  
ね。これをこねてしまうから」

マルカはお菓子の生地を型に流し込むと手を  
洗ってから、リタに向き合った。

「肩凝りの治し方なら治療師だって知っている  
でしょうに。どうしてあたしに訊きに来たのか  
しら」

「あれ？ それもそうだね。治療師に何か考えがあるのかしら」

「で、肩が凝っているのは誰なの」

「実はあたしなの」

「なんだそういうこと。じゃあ、その椅子に座ってちょうだい」

リタが台所の椅子に座ると、マルカはその後ろに立ってリタの方を揉んだ。

「あ、ちよつと痛いよつな、でも気持ちいいわ」  
「ずいぶん凝っているわね。お針子と同じくらい凝っているわよ。一体何をやったらこんなに肩が凝るのかしらね」

「それは秘密なの」

「でも、懐かしいわね。新米のお針子の頃はよくこうして先輩の肩を揉んだものだね。上手だつて誉められたのよ。お前は針仕事をしないで肩もみ専門になれなんて言われたわ」

「あ、これって新米が先輩にしてあげることなのね。だから、治療師はあたしにすたくなかったんだ」

「そうね、師が見習いの肩を揉むなんてあり得ないことだね。でも、あなたはあたしの娘だからいいのよ。甘えなさいね。まったく、最近

は夜帰って来て寝るだけなんだから。たまには甘えてちょうだい。でも、お父さんには内緒ね」肩を揉んでもらうのもとても気持ち良かったし、お母さんの手が触れていることも嬉しかったし、久しぶりにお母さんをゆっくり話をしたことも楽しかった。

けれどもあまり気持ちがよかったのでリタはうとうとしかけた。

「あら、いけない。ケーキの生地を寝かせすぎちゃうわ」

マルカはそう言って手を止めた。

「あたしも帰って治療師の食事の支度をしないと

……」

リタも椅子から立ち上がった。

「また肩が凝ったら揉んであげるわよ」

「あとであたしにも肩の揉み方を教えてね。そしたら、お母さんの肩を揉んであげられるわ」

それに治療師の肩も揉んであげられる。

リタは治療師の家に帰って、急いで食事の支度をした。スープを温めながら、どちらの家も「帰る」ところなんだなと考えた。

午後になってようやく一枚書き写しが終わった。

「まあこんなもんだろう」

それが治療師の感想だった。